

浜辺の薔薇

薔薇

美しい

葩の奥に

秘めていた

棘に触れてしまい

ズキズキと痛んだ

禁断の甘い馨香りと

酩酊と誘惑に溺れて我を

失い蹣跚な言葉は口から出る

度に迷子となるのは知っている

心は弄られて煽られて乱れて

蠱惑的な眼差しを受けて

漸次に棚引いていく

魅せられてしまう

霧中を彷徨い歩く

呑み過ぎた

時は朧気

記憶の

座礁

悠然

と聳え

.....
憂愁
梟

立つ牆壁しょうへき

にぶつかる想い

幾度も繰り返しては

脆くもろ儂く撃沈はがなしていた

愛、金、慾、酔い…

打ち寄せる渚なみさひの力を借りては

波乗りのように陸に置いていかれる

幾重にも絡み合っていた欲望というざんし残滓

底の知らない泥濘ぬかるみの奥は限度がない

腕もがけば腕もがく程余計ほじに嵌はまるのは

渴いた心でしかなくて

途方に暮れていたのは

帰って行くのを明確

に予期していた

繰り返す

日常の

一齣いちじつ

燃焼

を必ず

するのは

嫉妬まきという薪

を焼くべるからだ

燻くすぶり続けているのは

分かっているけれども

到底とうてい近寄れはしなかった

抵牾もじかしくてなす術すべがなかった

時間は経過することしか知らずに

残りは灰燼かいじんに積もって終わりだった

終幕を感じていたのにどうしようもなく

先が続いたのは微かに煌めいている残り火

瓦礫がれきに埋まって助けを求めるように細い

声ほのが仄かに煌々こつこつと耀きを放っている

暖かくて温もりを感じていたのだ

欲しくて手を伸ばしてみても

スツと水のように指先を

通って流れて行く身を

傍そばにいと冀こいねがっても

他者を安易には

寄せ付けない

不安定な

浜辺の

薔薇

愉悦の氷塊

唇が触れ合って
零れ落ちるのは
抑えられない儘
眠っている貴方
を包み込む情熱

切ない夜は枕を
相手にしている
一晩中無我夢中
国境が変わった
みたいに身体を
浮遊していたい

旅に出たいのよ
もう二度と家に
戻りはしないの
有頂天一切合財
持ち出して来て
犠牲なんか気に
しないで再出発

出来たらいいな
と強く願うだけ

絵空事苦心惨憺
えぞらごとくしんざんたん
思い浮かべては
連れ去られる心
現実に戻されて

氷塊した胸中を
溶かして欲しい
方法があるなら
貴方の温もりだ
世界にはいない

最後のプレゼント

唇で紡いでいた愛の詞
今では人のいない

砂の城に変貌を遂げてしまった

恋は爛れて夜な夜な彷徨う
行き場のないゾンビの様に

ワタシが最後に渡したいのは
遣る瀬無さの詰った拳

出逢いは偶然の産物
車内に置き忘れた傘を

呼び止めて届けるワタシ
莞爾のお礼に戸惑って
どうしようかと思ひながら

離れる
ただそれだけのもの

疑惑が蔓延って
ワタシを束縛する

緩やかな道程
単に願っていたのは当の昔

不図気付いた
斟酌するのは貴方の素敵な眼差しだと
幾度となく重なった

ワイングラス

けれども

酔うのは

意味深な視線

腕時計を見た

もうすぐ約束の時間だ

眠れない夜をどれだけ

繰り返したのか

思い出せない

記憶が落ち着きなく揺蕩して

静まらない

口から漏れるのは

欺瞞の花束

美しさに見惚れてしまい

隠れて見えない

色褪せた彩り

解っていた

ワタシの知らない音色に

満たされているのだと

気付いていない振りを

劇場で演じていた

定刻を報せる鐘の音が響いた

貴方が来るのだ

最後のプレゼントを受け取りに